

Peace Wave

Okinawa
Peace Assistance
Center

特定非営利活動法人
沖縄平和協力センター(OPAC)
沖縄県那覇市久茂地 3-15-9 アルテビル那覇
TEL (098) 866-4635/FAX (098) 862-0579
www.namcle.com/opac



OPACのロゴマーク
沖縄を飛び出し世界の
現場で活躍することを
イメージしました

沖縄の心を具体的な行動に
Transforming Okinawa's Heart into Action

2003.Oct.1 No.0

沖縄から平和の波が

平和を希求する「沖縄の心」を具体的な行動に

去る太平洋戦争中に、地上戦の戦場になった沖縄県は、多くの尊い生命と貴重な文化遺産を失いました。さらに、太平洋戦争後は、27年間にわたり米国の統治下に置かれ、米軍の軍事戦略の拠点としての役割をになってきました。施政権が日本に返還された後30年経過した今日なお、日米安全保障体制の要石として、在日米軍専用施設の75%が、日本の国土面積のわずか0.6%しかない沖縄県に存在しています。

このような歴史的体験を通じて、沖縄の人々は戦争の悲惨さとともに平和の維持にともなう厳しい現実を痛切に認識しています。同時に、自らの歴史体験を通じて、紛争の被害者の苦しみを自分の苦しみとして共有することができます。また、在沖米軍基地と接することにより、安全保障というものを日々直面する現実問題として肌身で感じており、人々が安心して暮らせる世の中の到来を願って止みません。

近年の国際情勢は劇的に変化し、沖縄を取りまく環境も不安定要因がますます拡大しつつあります。過去にもそうであったように、沖縄の平和と繁栄は、アジア太平洋地域の政治的・軍事的状況に左右されています。現在のアジア太平洋地域といえば、領土問題、民族や宗教の違いに根ざした対立などの地域紛争の火種が数多く存在するだけでなく、環境破壊、貧困、飢餓、災害など平和な社会の確立を妨げる危機的状況が多発している地域でもあります。

その潜在的火種や不安定要素を取りのぞく方法のひとつに、信頼醸成や対話の促進といった非軍事的な安全保障の枠組みによる協力活動があります。このような活動は、沖縄県民の共通の願いである世界の平和と繁栄に直結し、また地域が安定することによって、沖縄における「米軍基地の整理・縮小」の実現に結びつくものだと考えます。

しかしながら、沖縄は今まで、アジア太平洋地域の紛争解決や平和構築といった分野において、その歴史的な使命

に見合ったなんらかの役割を果たす踏み込んだ努力が足りなかったのではないのでしょうか。平和を築き維持していくためには、平和を語り継ぐばかりではなく、実際に必要な具体的措置を考え、実行していかなければなりません。

ユイマール（相互扶助）の精神に基づいて、アジア太平洋地域の人々と互いに助け合い、知恵をしぼり、共に汗を流して行動し、平和を築き上げていくことが大切です。平和を希求する「沖縄の心」を具体的な行動に結びつけ、沖縄をアジア太平洋・平和の交流拠点（パシフィック・クロスロード）にしようではありませんか。

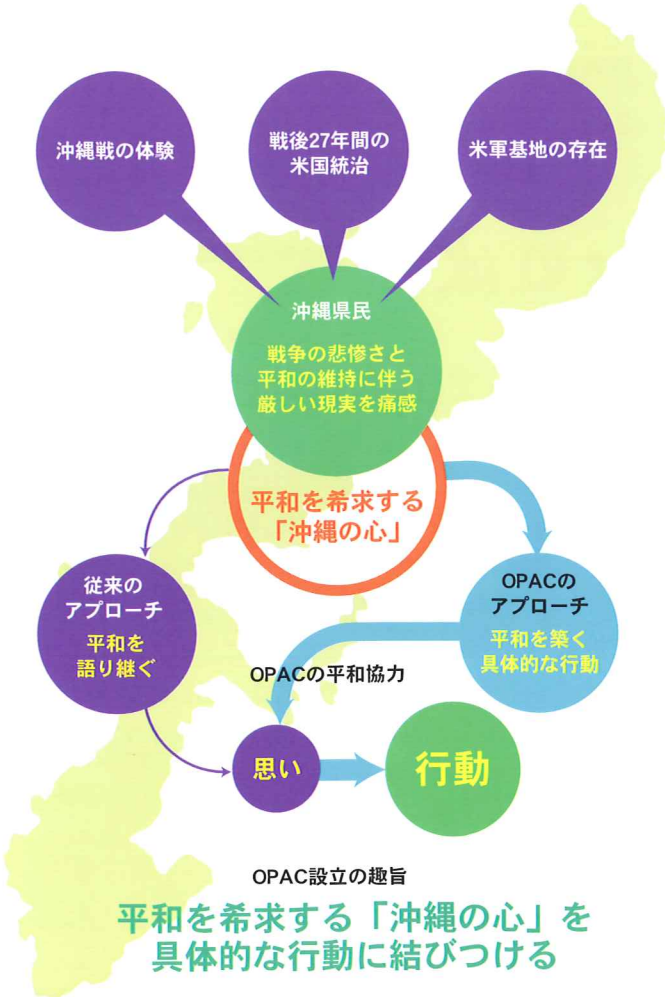


投票を待つ人々
東ティモール議会選挙
(2001年8月)



グスマン大統領候補の
支持者たち
(2002年4月)

そのためには、沖縄が、アジア太平洋地域の一員として、地域の平和と繁栄のために、自らの犠牲を最大限に活かした具体的活動を推進していくことが必要です。そこで国際平和協力を携わる専門家の育成や協力活動の実践、国際平和協力に関する実践的な調査研究、人的交流やネットワークの拠点として沖縄平和協力センターを設立します。



沖縄平和協力センターの4つの活動

1. 調査研究

アジア太平洋地域の紛争と平和に関して調査研究を行い、沖縄の心を地域の人々と分かち合う方策や沖縄の「基地問題」を解決する方策を提案していきます。

2. 協力活動

沖縄の心をアジア太平洋地域の人々へ届けるために、選挙監視活動などの紛争解決や平和構築に関与する具体的な支援活動を行っていきます。

3. 人材育成

平和は人によって築かれ維持されます。平和構築ワークショップなどの研修を通じて、沖縄の心の実践を担う若者の育成を行っていきます。

4. 交流・ネットワーキング

国際平和協力を行う様々な団体と提携して、協働の輪を広げていくことに努めます。

沖縄平和協力センター設立までの経緯

【平成12年度】

沖縄経済同友会の平成12年度調査研究「安全保障と基地問題に関する調査研究」の中で、「沖縄・アジア太平洋平和協力センター（仮称）設置構想の実現化にむけて」が提言された。また、（財）南西地域産業活性化センターの平成12年度調査研究「沖縄におけるエネルギーと総合安全保障に関する長期的研究」の一環として「安全保障と基地問題」が調査研究テーマに取り上げられ、アジア太平洋地域の紛争や自然災害など総合的安全保障問題を研究し平和協力活動を実践する機関の設置が提言された。

【平成13年度】

（財）南西地域産業活性化センターの平成13年度調査研究「沖縄におけるエネルギーと総合安全保障に関する長期的研究」の一環で「基地問題と総合安全保障に関する研究」が実施され、そこで平成12年度に提言された機関の設立に向けた調査を開始した。同調査報告書では提言機関の具体的な事業内容などが提言され、本格的な設立準備の必要性が指摘された。

【平成14年4月1日】

（財）南西地域産業活性化センター内に「沖縄平和協力センター（OPAC）設立準備室」を設置し、設立準備を専門に行う部署に専従の職員を雇い準備を進める。

【平成14年8月9日】

沖縄平和協力センター設立総会を開催する。

【平成14年10月17日】

沖縄県より特定非営利活動促進法に基づく特定非営利活動法人（NPO法人）の認証を受ける（沖縄県指令文第838-1号）。翌日、設立登記を完了し、正式に法人設立となる。

【平成14年11月1日】

NPO法人沖縄平和協力センターとして、（財）南西地域産業活性化センターとは別の法人格を所有し、独立した組織として活動を開始する。

東ティモール青年を招へい
(2002年11月)



OPACは 何をやっているの？

国際選挙監視活動

- カンボジア 地方選挙(2002年) 総選挙(2003年)
- 東ティモール 議会選挙(2001年) 大統領選挙(2002年)
- 【今後の予定 インドネシア、アフガニスタン、イラク】



カンボジア選挙監視活動中の
若き日の上杉事務局長(1998年7月)

平和構築研修・人材育成

- 『沖縄と平和構築』地域振興と戦後復興(2002年)
- 『沖縄と平和構築』戦後復興の3要素と和解(2003年)
- 『平和構築ワークショップ』沖縄の戦後復興(2003年)

青年招へい事業

- 東ティモール青年指導者20名(2002年11月)
- アフガニスタン青年行政官15名(2004年2月予定)

セミナー・講演会(以下主要なものを抜粋)

- 『緊急医療援助と沖縄の可能性』菅波茂 AMDA代表
- 『復興・開発支援と国連』明石康 元国連事務次長
- 『国際紛争:イラクと北朝鮮』村井友秀 防衛大学校教授
- 『東アジア安保と日米同盟』村田晃嗣 同志社大学助教授

*詳細はOPACのHP(<http://www.namcle.com/opac>)
「プロジェクト」を参照してください。

平和協力プロジェクト

- 東ティモール『除隊兵士社会復帰支援』(2004年以降の実施を検討中)

行動は人に 感銘をあたえる



NPO法人沖縄平和協力センター
理事長 金城 清

特定非営利活動法人(NPO法人)沖縄平和協力センターは、平成14年10月17日に沖縄県知事の認証をうけ事業を開始しております。早1年を経過しようとしています。これもひとえに、沖縄経済同友会はじめ(財)南西地域産業活性化センター等関係機関のご指導ご鞭撻と会員の皆様方や関係各位の深いご理解とご支援のたまものであり、衷心より感謝申し上げます。

さて、沖縄県は人口130万人の小さい島ですが、アジアのキーストーンと呼ばれ、日米同盟の要として在沖米軍基地が数多く存在し、日本およびアジアの軍事的安全保障に貢献しています。しかし、有事さながらの米軍の関わる事件・事故等が発生し、県民は不快感を抱きつつ生活し産業活動を行っております。県民は、基地の整理・縮小と平穏な生活を願う「沖縄のこころ」を訴え、この過重な負担を日本国民に認識してほしいと乞い願っております。

一方、近隣諸国のアジア太平洋地域は、わが国の重要な貿易国であるとともに、領有権・経済問題や民族・貧困問題等からんだ地域紛争の火種が多くあり、同地域における多国間安全保障(特に人道的援助など)の構築が課題となっています。これらの課題にわが国の旗が見える貢献策が求められています。平和の理念ばかりを唱えるのではなく、自ら実践・協力していくことが最も肝要なことと思います。「議論は人を分けるが、行動は人に感銘を与える」といいます。

NPO法人沖縄平和協力センターは、これらの問題解決に実践的な協力活動を行うプロの人材を育成し、人道的援助など総合的な安全保障に関する研究活動等を目指し、将来的には基地や兵力が縮小された平和な国・地域づくりを願っています。

終わりに、従前と変わらぬご理解とご支援をたまわりますようお願い申し上げます。



OPACが取り組んでいる調査研究

沖縄の戦後復興 プロセスの体系的整理

担当研究員
仲村京子

沖縄の戦後復興の経験を、現在復興に直面している人々に体系的に伝え、そこから教訓やヒントを導き出してもらいたい。このような思いから、この調査研究は立ち上がった。そこでOPACでは、澤岨悦子氏(元沖縄タイムス記者)を客員研究員に迎えて、調査研究チームを立ち上げた。平和構築という視点から、途上国への支援を念頭に、政治行政、教育、保健医療、経済産業の4分野を横断的に調査して、沖縄の戦後復興プロセスを包括的にまとめた今までにないテキストを作成する。

OPACの 賛助会員になるには？

Q1 年会費はいくらかかるの？

A1 年会費は1口3,000円で、何口でもお受けします。

Q2 会員になるメリットは？

A2 1口以上で、OPACの行うイベントへのご案内と勉強会への無料ご招待。3口以上で、ニューズレター(毎月発行予定)が送付されます。

Q3 イベントは何をやっているの？

A3 講演会、セミナー、シンポジウムなど3ページを見てください。

なお、賛助会員の他、名誉会員、正会員などもあります。



OPAC会員と外国人の交流会

振込み先

銀行：琉球銀行 本店
口座番号：普通469250
口座名：沖縄平和協力センター
理事長 金城清

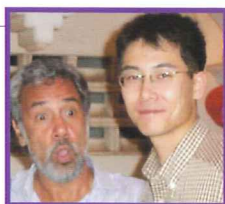


OPACのTシャツ(デザイン：南島詩人)

心が熱く通じ合う 沖縄と東ティモール

コラム

NPO法人 沖縄平和協力センター
事務局長・主任研究員
上杉勇司



グスマン(東ティモール)
大統領といっしょに

21世紀最初の独立国となった東ティモールの青年団が来県した。国境を越えても響き合う心のこもった温かいもてなしを受けた。例えば、南風原高校の郷土芸能コースや浦添商業高校の国際観光科の皆さんと交流する機会があった。肌の色も違い、言葉も通じない人々の手を取り、一緒に踊ったり笑ったりしている高校生を見て、心と心で交流している様子が伝わってきた。これはすばらしい沖縄の宝であり、それが若い世代に着実に受け継がれている様子を見て本当に羨ましかった。日本軍元兵士の方たちが、青年の来県を知ってかけてくれた。ティモールでお世話になったお礼がしたいのだという。ティモールという響きを聞いて半世紀以上も前の出来事が鮮明に思い出されたようだ。この時空をこえた思いに、東ティモールの青年たちも心を打たれていた。

青年たちは、2泊3日のホームステイも経験した。各家庭が

2003年7月27日・カンボジア 初めて選挙監視しました。



OPACスタッフ 長嶺聖子

投票日。ぴりぴりした緊張感が支配する投票所の中でスタッフはみな威厳にあふれていた。各政党からの立会人は真剣な眼差しで準備を注視していた。それとは裏腹に、外では有権者が笑顔で開場を見守っていた。きれいな服に紅をさした女性たちや、はじめての選挙で顔をこわばらせた青年、彼らの表情からは投票日を心待ちにしていた様子が伝わってくる。彼らにとって選挙はまぎれもなく晴れの日であり、私自身、監視員として今回の選挙にかかわることができた喜びを心から感じた瞬間だった。

投票終了後、各政党立会人が待ちかまえる中、投票箱が慎重にバイクの荷台に載せられた。これまで晴れ渡っていた空から、雨粒が落ちはじめ一気にスコールへ。投票箱を運ぶバイクの群れは開票所をめざした。細いあぜ道を歩く牛飼いの少女たちの視線をあびながらバイクは進む。遠くの青空と一面に広がる緑。そして雨の中輝く銀色の投票箱。彼らの希望と強い思いがたっぷりと詰まった投票箱を見つめていると胸が熱くなった。

カンボジア選挙監視員の身分証明書



編集後記

冷夏の日本にあって、沖縄は例年より暑い夏だ。ここでは夏が10月一杯つく。そして、10月になるとOPACは設立一周年を迎える。現在のOPACのスタッフには、修士号や博士号を持った研究者もいれば、カンボジアのPKO要員だったフィールドワーカーもいる。まだまだ小さな組織だが、それぞれの持ち味を生かし、力を合わせて活動に打ち込みたい。沖縄では、できないこともあるだろう。しかし、沖縄でしかできないこともあるはずだ。日本の南端にある沖縄から、閉塞状況に陥っている日本に風をあけていきたい。

それぞれ工夫を凝らした受け入れをしてくれた。帰り際に別れを惜しんで涙ぐむホストファミリーや青年たちの姿を見ると、短い期間ではあったが充実したステイだったと思う。

今回の東ティモール青年団の来県は、NPO法人沖縄平和協力センターが設立第1号の事業として実施したものだ(国際協力事業団の青年招へい事業)。この事業の目的は2つ。沖縄の戦後復興の事例を通して東ティモールの国造りのヒントを得てもらうこと。そして、独立を果たし国造りに燃えている彼らと交流することによって、沖縄の青年たちが彼らの情熱を吸収すること。

果たして、東ティモール青年団は、沖縄戦の悲惨さを語る平和ガイドの声に熱心に耳を傾け、教育機関の復興について詳細にメモを取り、「ニライカナイは海の向こうではなく、自分の足元、自分が今いる所にある」といった言葉に強く頷いていた。

今回の青年団の受け入れにあたり、多くの方が快く協力を引き受けてくれ、交流を心から楽しんでくれた。別れ際に交わした東ティモールの青年たちとの握手からは、新しい友情の芽生えが感じとれた。一緒に仕事をしてきた仲間たちが涙を流していた。涙が湧き出るほど充実した仕事をする事ができて本当に幸せだと思う。これこそ、ボランティアのだいご味だ。